

No. 1690

“首都の顔”めざして

—— 都知事選 ——

13都道府県知事選挙が4月9日の投票日に向けてスタートしました。注目の都知事選挙を無党派で戦う大前研一、岩国哲人、上田哲、青島幸男さんらの候補者は政党離れの浮動票を狙って各自独特の選挙戦を展開しています。共産党が推薦する黒木三郎さんには不破委員長自ら「革新都政を取り戻そう」と呼びかけていました。一方、自民、公明、社会、新党さきがけ、自由連合の5党が推薦、支持する石原信雄さんの演説会場には武村蔵相、河野外相、村山首相ら連立政権の党首が応援演説にかけつけました。900万を超える有権者のうち半分以上が浮動票といわれる都知事選。移り気な有権者の票を集めて「首都の顔」を射止めるのは誰でしょうか。

ごみを生かす農場

—— 茨城 ——

食品メーカーや農協、学校の給食などの食品廃棄物を無料で集めて動物の飼料に生かしているユニークな農場があります。茨城県大洋村にある「富士福祉農場」近くの港からは商品として利用できない輸入食品が持ちこまれています。農協からは大きすぎたり曲がっている規格外のサツマイモが届きます。そして東京の食料品のメーカーからも賞味期限の残っている未だ商品として通用する食パン、ケーキ、菓子などの食物が山のように持ち込まれてきます。新鮮な食料品はそのまま牛や豚の餌としてすぐに配られます。しかし大部分の食料品はシャベルカーで飼料製造機に入れられ活性菌とまぜられ加熱・醗酵させ粉末飼料にして動物に与えています。ここでは機械2台で毎日6トンの飼料をつくり、畜産農家の使う配合飼料代に換算すると年間4,200万円の節約になるとか。農業敷地内で飼料製造機と活性菌を製造しているみのり産業の山本さん親子は各地からの機材の注文で忙しい毎日が続いています。農場で共同生活をする14人の知的障害者と手助けをする3人のお年寄り。一日の仕事が終わり話題のはずむ楽しい夕食風景がつつきます。育成した豚肉は自分たちで建てた直営店でブロックにして販売され、3月には保健所から品質検査合格の知らせも出て安い値段と共に売れ行きも好調のようです。養鶏場で卵を生まなくなったメスにかわり「廃鶏」を引き取りこの農場で自然の中で育てた結果再び卵を産む元気を回復、「ながいきたまご」と名付けられ出荷されています。場長の菅谷さんは食品廃棄物をもっと活用してすべての生命が生かされる環境をつくりたいと意欲を燃やしています。

ながいきたまご